

令和七年度 山口県立大学 国際文化学部 文化創造学科
学校推薦型選抜（地域貢献人材発掘枠） 「小論文」 問題用紙

問 次の文章を読み、その要旨を示したうえで、コミュニティデザインにおいて、アートの専門家ではない地域住民が生み出した作品に着目する意義について、具体例を挙げて、あなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。

地域のビジョンや、抱えている課題を乗り越えるためのアイデアを住民たちが考えて、それを実現するための手法自体を、コミュニティデザインと呼ぶようになった。コミュニティデザイナーの仕事は幅広い。日本各地で食、農、自然、福祉、観光、アート、教育、環境、エネルギー、医療、防災など、多様なジャンルのプロジェクトに携わっている。関わり方も多彩だ。地域ブランディング、中心市街地活性化、計画策定、パークマネジメント、人材育成・研修、施設・空間活用、特産品・観光開発、ソーシャルデザインなどだ。

コミュニティデザイナーの山崎亮^{やまざきりょう}らが、これまで取り組んだプロジェクトのなかで文化的な活動を通じ、つながりをつくっていった事例に、「瀬戸内しまのわ二〇一四」がある。地域イベント魅力向上支援事業としておこなわれた。

瀬戸内といえば「瀬戸内国際芸術祭」が有名だ。香川県の瀬戸内海の島々と高松港を中心に、三年に一度のトリエンナーレ形式で開催されている。一〇〇万人を超える来場者があり、日本を代表する国際芸術祭となっている。

一方で、「瀬戸内しまのわ二〇一四」は、広島県と愛媛県の沿岸部と島嶼部^{とうしょ}で開催される観光まちづくりのイベントだ。瀬戸内海沿岸にある広島県十市町、愛媛県三市町が参加して、二〇一四年三月二日から十月二六日までの約七ヶ月にわたっておこなわれた。行政区を超えた広域の取り組みで、「観光振興（交流人口の拡大）」と「豊かな地域づくり」を同時に実現することをめざした。

「豊かな地域づくり」の重要な課題としたのが「人の活性化」だ。「人の活性化」を、生活者が自分の住んでいる地域を愛するようになり、「地域のために、自分も何かできないか」と考え、主体的に何かをし始めること、ととらえた。「しまのわ」というプロジェクトにコミュニティデザインを取り入れることでめざしたのは、本来の意味での「地方自治」のあり方を探究することだ。「自分たちができることからする」というコミュニティデザインの手法を使い、「自分の足元に宝を見つけ、人をもてなし、自分たちも楽しむ」ことを実現することは、生き残れる地方自治体になるための準備であると考えた。

実施されるイベントは、県や自治体が企画するものも含めると三〇〇を超える。コミュニティデザイナーは、そのうち市民が自主的に企画する一五〇のイベントをサポートした。そのうちのひとつが、「音戸^{おんど}のおかんアート美術館」だ。呉市音戸町で手あそびの会が企画した。

音戸は、昭和の中頃まで、瀬戸内海を行き交う船が天候回復や潮目を待つために港に停泊したため、船員たちを迎える店や遊興場が軒を連ねてたいへん賑わっていた。今はその役割はなくなり、高齢化と人口減少が進みひっそりしたまちになっている。だが一方でかつてのまち並や繁栄の面影を訪ねて、まち歩きを楽しみに来る人も少なからずいる。

まちなみガイドとして活動していた山口シズホは、しまのわ講座をきっかけに、自宅をまち歩きの

休憩所にはどうかと考えた。音戸には散策の途中で立ち寄れる休憩所がないことが課題になっていたからだ。さらにその自宅休憩所に、訪れた人を楽しませるために得意の手づくり作品を展示することにした。これが「おかんアート美術館」だ。

「おかんアート」とは、主に中高年の主婦（母親＝おかん）が余暇を利用して創作する自宅装飾用芸術作品の総称である。具体例としてはドアノブ飾り、刺繍入り家電カバー、タオル掛け、人形、牛乳パックアート、かみつきへび（指ハブ）などさまざまだ。

山口は、女性たちがおしゃべりをしながら作品作りを伝授する「手あそびの会」を主催していた。知り合いの主婦たちにも声をかけ、パッチワークや押し絵、盆栽などの作品もこの機会に展示することにした。

使っていなかった昔の家の一角にこうした作品を並べて美術館にする。山口は、ひとりで掃除をするにはどうしたらよいか頭を悩ませていた。コミュニティデザイナーと一緒に片付け、展示づくりを手助けた。ポスターやチラシはコミュニティデザイナーが作成した。

こうして「おかんアート美術館」は実現した。玄関先では五円玉できたお城が迎える。土間の棚の上は造花でいっぱいになった。ビールケースの上の盆栽は、友人とおとんの作品だ。土間から部屋の中に入るとミニ千羽鶴ののれんが掛かっている。牛乳パックを素材にした椅子もある、壁には二〇年かけてつくった緻密なパッチワークの作品も架けられた。机の上には虫眼鏡で見る二ミリサイズの草履も展示された。着物端切れでつくる草履、タワシでできたリス、新聞紙でできたコサージュ、熊のぬいぐるみなど、おかんたちが身近にある素材で手作りの作品が所せましと並んだ。

しまのわの開幕と同時に一週間限定の美術館がオープンした。噂^{もも}を聞きつけて、音戸町内外から一日一〇〇人以上が訪れた。場所を問い合わせる電話は鳴り止むことがなかった。訪れる人にはもれなく作品をプレゼントし、つくり方を問われればその場で教え、昔の写真まで見せてくれるおかん達のおもてなしは、本人たちの予想を超えて喜ばれた。来訪者たちを喜ばせた要因を、このプロジェクトを支援したコミュニティデザイナーは三つ挙げている。①おかんたちにパワーをもらった、②作品を見て創作意欲が湧いた、③音戸のまちをよりディープに楽しめた。観光客だけではなく福祉施設の職員が、職場でも生かせそうだと作品のつくり方を教わっていく一幕もあった。

（中略）

おかんアート美術館のプロジェクトには、コミュニティデザインによる地域おこしの特徴がよくあらわれている。住民自らの発想を大事にして、コミュニティデザイナーが助言し、手伝い、試して形にしていく。住民たちの行動が思わぬ広がりを見せ、さらに人を巻き込み、新しいつながりができる。地域にある文化資源を目に見える形にしてわかちあう、あるいは新たな文化資源を生み出す。こうして人と人がつながり、人も地域も元気になっていく。「自分の足元に宝を見つけ、人をもてなし、自分たちも楽しむ」ことを実現させる。このことで、当事者による本当の意味での「地方自治」を追求するのだ。

（出典 佐々木秀彦『文化的コモンズ 文化施設がつくる交響圏』みすず書房、二〇二四年、五四六～五五一頁による。以上の文章に記述の形式について最小限の手を加えた。）

令和 7 年度 国際文化学部 文化創造学科 学校推薦型選抜（地域貢献人材発掘枠） 小論文 出題意図

【課題文の出典】

佐々木秀彦『文化的コモンズ 文化施設がつくる交響圏』みすず書房、2024 年、546-551 頁。

【出題意図】

この設問は、地域における創作活動をテーマとして、コミュニティデザインにおけるアートへの着目に関する見識を問う。とりわけ、アートの専門家ではない地域住民によって生み出された作品を地域おこしに活かす意義や課題を読み取り、その意味を具体的に理解できる思考力が身についているかを評価する。また、受験者が、自らの経験や知識に基づいて、自身の考えを日本語で適切に表現できているかを問うものである。